
マモノの味方、それは勇者

かちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マモノの味方、それは勇者

【Nコード】

N8488Z

【作者名】

かちん

【あらすじ】

生まれつき聴覚障害を持っていて、音を感じ取ることが出来なかった少年・鹿羽聖徳。

偶然事故に遭い命を落とすも、『秘術遣い』によって魂が天界に運ばれ、

魔王という魔物を統べる存在によって終焉の危機にさらされている別世界の勇者に成ることを条件に、

復活出来るシステム「転生勇者」に合意し生き返った。

転生勇者を使用する際に、個人の特徴を生かして「神」から付与される異能として、

「異常聴覚」の力を手にした。

この力のお陰で、人種ではない種族・魔物の言葉が分かるようになり、彼らに助力するような日々を過ごす事に。

しかし後に、異世界における決定事項が覆される真実を知る事に……。

001：出会いの前

カタストロフ界歴三九八七年。

日本時間にして、二〇一四年八月一九日。

どこぞの異世界に転生してから早くも三日が過ぎたが、今のところ何も起きる気配がない。いっそのことこのまま草原の中心で寝続ける事に意義があるのではないかと時々錯覚してしまうぐらい、要するに暇だった。

季節は、日本で言う夏の終わりかけといった時期だったために、少し吹く風が心地よく、一つの太陽の日光が頭に当たり、眠気を満喫するには絶好の機会であった。

ボロ雑巾を縫い合わせたようなシャツと、これなたボロ雑巾を合成させた拳句生まれたボロ雑巾製のズボンのようなものを穿いて、のんきに昼寝を楽しんでいる者が、

まさか勇者とは思えない。

といっても、なんだったかな、確かNo.3456の勇者だったかな。

つまるところ、俺は大層な名義を掲げた、大英雄、いわば勇者とやらの一人なわけだ。此処で疑問が発する。何故勇者が複数居るのか。そこが謎だ。ここんところの疑問を、俺を嘲るように眺めているであろう”神”に訊いてみたいと思う。

と、そんなことをふと、どうでもよく、本当にどうでもいい思想を頭の中の思考回路で駆け巡らせていたら、右耳がぴくりと動きやがった。叫び声が聞こえたのだ。これまた「助けてくれ」だとか「俺は何もしてないじゃないか」なんていう、言い訳が混じった悲鳴で、考えるにこの叫びは、断末魔の悲鳴とでも捉えるべきだろう。

当然、黙って見過ごすわけにはいかない　なんて大層な事を吐

くわけにもいかないのさ。

勇者として転生したからって、別段ご立派でお利口な能力なんてものを手にしたわけでもないし、伝説の聖剣を持っているわけでもましてや可愛い妖精付きのハッピーセットをゲットしたわけでもない。

いやまあ、”神”から異能と呼ばれる力をもらったのは確かだが、これが戦闘能力に影響を及ぼすわけでもないし、勇者らしい力でもない。

如何せん可哀想な能力だ、と言うとそれもまた否定せねばならない。

どうやら”神”からもらったこの異能は、個人の特徴に関係しているらしいのだ。

要するに、そう。

俺は生前、聴覚障害者だった。

生まれつき音を感じることが不可能で、永遠と音のない世界で生き続ける事を定められた人間だった。うまく言葉も発せなくなり、いつか絶望したこともあったが、数年経って前向きに生きていくと決意してからは、毎日がエンジンヨイ出来るものだと感じていたこともあった。

それが突然、悲劇の交通事故、なんてイベントに巻き込まれて、即死を遂げた。

なに、別に少年少女を庇ったとかそういう大層なものではない。

交通事故　つまり大型トラックに轢かれる前に、俺は自転車に轢かれた。幸いにも怪我はなかったが、轢いた方は慌てたのか、急いで車道の方に出て行って逃げようとしていた。そこにトラックが現れたのさ。音を感じない俺はトラックのエンジン音を知らず、逃げていく自転車を捕まえようと車道に出た。こっちも慌てていたわけだ。今考えるとその行為は愚行だ。すると、いつの間にか目の前

に馬鹿でかい鉄の塊があり、轢かれる寸前に俺は自転車を押し倒して、見事、自分だけがはねられる結果となった。

つまり、俺が 生前 などとほざいたのはそういうことで、要するに俺は死人なのだ。

それが、どういう紆余曲折があったのか、”神”とかいう野郎に『転生勇者』というシステムに選ばれ、蘇りを果たした。しかし、だ。その条件として、”勇者と魔王が存在する世界”において、一人の勇者として魔王を倒せという命令を出されたのだ。嫌な予感ハ的中した。

その世界に来て一日目で、俺は見たことのない化け物と遭遇した。例えば、目のある人食い花とか、空を飛ぶ猿とか、炎で出来た人型とか、いろいろだ。

不幸中の幸いか、俺は化け物を見ただけで、襲撃されたことはなかった。

それから三日、逃げる事だけを意識していた俺だが、気がつけばこの草原のど真ん中で横になっていれば、誰にも見つかることなく過ごせていたわけだ。

だが。

今回はそうはいくまい。

明らかに右方から悲鳴が聞こえる。

なんだかもう、此処でずっと知らんぷりをしていれば、”神”から天罰でも食らいそうだったので、仕方がなしに、俺は起き上がって、服についた汚れをぱんぱんと手で払い、歩き出した。

右方には、深緑の森林が広がっている。

見た目からして「何か出そうな」雰囲気ではあるが、なに、散々化け物を見てきたのだから、今更森林の雰囲気ごときに怖がる必要は皆無だ。

故に勇者だぜ俺は。

なんていう自問自答をしているうちに、深緑の森の入り口である場所に辿り着いた。

そういえば、先程聞こえていた叫び声はすでに消え失せている。もう俺の出番もないのではなからうか。

しかしなんだ、此処まで来たのだから行動を起こすべきであろう。ゆつくりと、俺は森の入口へと踏み出した。

虹色に輝く葉っぱだとか、蛇のように動く蔓だとか、顔のようなものが生えている木々といった、恐怖演出に関してはジャパニーズホラーの域を軽々と超えてある森の中身に、早々俺は驚愕、というより恐怖した。

いやはや参った。

今すぐ立ち去りたい気がするが、一向に足が止まらない。

Why? それはごくごく簡単なものだ。つまり、足を止めればそれまで歩いていても平然だった事実を否定することになるがために足を止めると何か起こるのではないかという勝手な幻想に飲み込まれてしまったからだ。

要するに、歩いていても何も起こらない。では、足を止めたら何か起こるかもしれないじゃないか。という自虐妄想に陥ってしまったわけだ。

が。

しかしあつさりと、実に軽々しく、俺は足を止めてしまった。

「……おいおい」

実に三日振りであろう、俺は口から声を発した。発することが出来た。

嫌にも見るほかなかった。

そこに。

そこに、茶色と緑色の混じった皮膚を持つ、身長一〇〇センチくらいの小人みたいなものが、紫色の血を流しながら傷だらけで倒れ

ていたのだ。

特徴的といえば、頭に黄色いヘルメットをかぶっている。

両方に突き出た尖った耳。でかい顔。黄色くて鋭い瞳。口からは
み出た牙。

こういうの、確か 妖精とか小人の類で、

「ゴブリン」

とか言うんだっとな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8488z/>

マモノの味方、それは勇者

2011年12月26日22時00分発行